
国家主導非人道的実験

凪竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

国家主導非人道的実験

【Zコード】

N7338E

【作者名】

凧竜

【あらすじ】

何も変わらない習慣、ただ過ぎていく日常。一介のフリーター 神城空しろくうはそれで満足していた。しかし某国の“カンパニー”主導で行われている人道を完全に無視した“実験”のモルモットに選ばており、自らの人格、権利、尊厳を踏みにじられながら過酷な運命に翻弄されていく・・・10／23蜘蛛の復讐が完結したのでテッド・ラインと合わせて復活しました！

プロローグ

？？時？？分？？？？

―― 暗闇に包まれた一室

その部屋には円形のテーブル上に設置してあるプロジェクターを通して青白い姿を投影された、人型達のホログラムが議論を繰り広げていた

実際にこの部屋に居る立体映像ではない人間は、機械の準備を行つた一人だけであり、その本人は部屋の片隅に突つ立つたまま、立体映像達の会話を見守つている

青白く光る男達は事情を知らない一般人にとつてみれば、意味不明ともいえるが、関係者達が聞けば卒倒するような事実の応酬を繰り広げていた

「現段階の計画進行率は58%。予定よりあまり進んでおりません」

「監視対象03の行動は、予想を13%ほど逸脱しております。これは辛うじて隠蔽できておりますが、これ以上イレギュラーが発生しますと情報操作にも支障をきたします」

「やはり、“カンパニー”の幹部連中共にこちらの弱みを握られ過ぎて無理難題を押し付けられていたのが仇となりましたな」

「あなたが酒の席で、不用意に機密をべらべら喋り過ぎたのも問題をややこしくしている一因なのでは？」

「奴らの本社が存在する本国は人口も国土面積も科学技術すらこちらの遙か上の水準に達していますのに、こうも厄介事ばかり押し付けられてはどうも致しかねますね」

「便座上奴らの国とは同盟関係にありますからな、“カンパニー”のバックにあの国が有する軍隊が付いてるのも厄介ですが、ここで媚を売るのも悪くありますまい」

「しかしですな、、我が国で“実験”を行つのは一向に構わないのですが。こうも結果ばかり追究され“実験”を強行するあまり、やりすぎますと右翼まがいの連中に嗅ぎ付けられた挙げ句、厄介な事になりますぞ」

「まあ、彼等は彼等なりの思想、理由に基づいて存在するのでしょうかね、、ただのテロリスト風情が亡国の勇士を気取るのは辞めて貰いたいモノです」

「私は大いに賛成ですぞ。メディアを駆使して国民の印象操作を行う事も出来ますし、“実験”を我が国にて行つ事により、“カンパニー”の連中に恩も卖れます故・・・更に、多すぎる人口の調整も出来ます

実際に微々たる数ですが」

「巻き込まれるのは我々ではありますんからね」

その言葉が発せられた後、どうと室内の空気が沸き闇の中に点在する複数のスピーカー越しからのべぐもつた笑い声で満たされる

その種類も部屋の人数に応じて、実にバリエーションに富んでいた
軽く失笑を浮かべる者

笑いを必至に噛み殺している者

あからさまに隠そうともせずに爆笑している者

果たしてこの光景を第三者

例えるならば、この国の国民がテレビに映るものとは違った顔を見せる

余りにも自分達に対し笑い事では済まされない、不謹慎過ぎるラックジョークを肴に笑う彼らの姿を、仮に目にしたとなれば

彼らがよく知ったテレビに映る政治家達と比べ見た時、どんな表情を浮かべるのだろうか？

会談を静かに見守るだけだった彼は、ふとそんな事を気にしていた

I 田中〇一（前書き）

結構前の文章を手直ししただけなので、読みにくいかも

7月23日 6時30分アパート・かみしろくう神城空の部屋

ちりりりりりーん

いかにも軽薄を音にしたかのよひな、田覚まし時計が奏でるアラームで空は田を覚ました

まだ意識は眠気の誘惑に従い、一度寝を推奨してくるが、それを強制的に叩き起こし彼はベッドから起き上がる

ふと、時計を見てみると針は6時30分を指している
近所の駅から出る電車で20分で着く隣町のスーパーでのバイトが始まるのは9時

朝飯と昼の弁当をこしらえるには時間は充分だった

尤も、田覚ましの仮図と共に意識が田覚めるのはさほどのことだ。
いつも通りならばアラームがなり終わる寸前か、こぞとこう時の保険に設定した携帯のバイブで起こされるのだ
まあ、それはプラスに考えるべきなのだろう

いつもより炊事にかけられる時間が増えたのだから、早起きした自分への褒美もかねて今朝はそれなりに豪華なものを作りつ

と、その前に顔を洗わないとな

そこまで思考が進んだ所で洗面所へ向かう

鏡を覗きこむと僅かに無精髭をはやした自分の顔が見えた

(髭つて伸びるの早いな、つか毎日剃るのが面倒くさい)

充電式の電動髭剃機を顎にあて、不器用な仕草で無精髭の生やした顎を往復させると、よつやく出勤前の支度が整った自分の顔が拌めた

これで支度はよしつと。いや、肝心の歯磨きを忘れていたをだつけ

空は自分の間抜け具合に苦笑してから一、三分程で用事を済ませると、朝食とバイトの弁当を作りに台所へ向かつた

毎朝の習慣で台所前の居間に置いてあるテレビの電源を入れる

早速淡々と昨日の出来事を告げるキャスターが画面に表示された

「……………です。次に、昨日〇〇市にて死傷者6人が出てしまつた連続通り魔事件の続報をお伝えします」

こういったニュースを耳にするたびに空は胸が苦しくなる

どうしてこんなに悪い事をする奴が出てくるのだろうか?

人様に迷惑を掛ける輩は自分達のしている所業を愚かだとは思わないのか?

自分の親や大切な人達、被害者達の気持ちが解らないのだろうか?

幼い頃から考えてきた微かな疑問

両親に訊いても曖昧にはぐらかされる、それが何処にでも転がっているような模範的な理屈ばかりで納得のいく回答が得られなかつた

己の胸に未だ在り続けている明確な答えが出されていない問題

おっと、また考え方に入っちゃつた

これじゃあ何時までたつても朝飯が作れないな

「犯人は警官隊により確保されましたが、錯乱しており奇声や拘束を逃れようと暴れるばかりで、現在動機の解明が困難な状態にあります。警察は犯人が落ち着くのを

未だに続くニュースキャスターの声を耳から完全にシャットアウトし、俺は台所に入った

そして30分後

「いやあ～我ながらなかなかの出来映えですなあ～」

ニュースをみた後の暗い気分を吹き飛ばして朝食を作った空の第一声は、予想に反して美味そうに仕上がつた己の料理（失敗作？）に対する賛辞だつた

「朝からあまり腹に溜まるものは食いたく無いんだけど、ま、いつか～

そつとつて自称最高傑作である昨日の残り物で作った天ぷらを市販のそつめんの汁に浸し、炊飯器の予約機能を使って炊いたホカホカの「ご飯に乗せ、頬張る

「う～む。皿いつ！」

つゆが滴つた肉入りの天ぷらがふわふわで、炊きたての米と秦であるハーモニーは実にテリシャスな感じで空の口の中に広彼に至福の時をもたらした

「残り物の失敗作チソジヤオロースを天ぷらにするのは逆転の発想かつ、なかなかの冒険だったが、まさかここまで美味しいとは！」

次はラーメンを揚げてみよう。と密かに野望を決意する

弁当の中には、これやミニートボール、チキンナゲットそしてメインディッシュの「ご飯が入っていることを考えれば、昼飯の時間が朝食時より楽しみになるのは至極当然必至である

そこそくと我に帰つて時計を見ると始電の十五分前を指していた。

家からでも全力で走れば間に合つ距離はある

やべ、浮かれすぎた

早く行かねえと遅刻になっちまつ

早起きしたのに結局出るのは何時通り、ギリギリの時刻になつてしまつた

何時もと変わらぬ普通の日常

その日常とやらがあんなにも簡単に崩れてしまつなんでことはな

今のままでは予想すら出来なかつた

I 田川〇二（前書き）

パソコンが欲しいなあ

7月23日8時58分・空のバイト先のスーパー

「・・・間に合つた」

先に結論からいふと空はバイトに間に合つた

早起きしたはよかつたものの、朝食の件で浮かれはしゃぎ過ぎたお陰で、何時も通り遅刻間際でバイト先に滑りこむことになり、務め先のスーパーの店長に労い（殺意の）籠もつた視線を浴びせられたのだが、ギリギリ始業時間前に来れたので其処は不問となつた

しかし、その後店長に

「もう少し早く来てね空クン。じゃないと次はクビかも、ね」

とすゞい鬼気の迫つた笑顔とセツトになつた説教を食らひてしまつたので次回からはそれなりに気を付ける事にしようと決意した空であつた

そして彼は今メインのレジ打ちの仕事に取りかかる前に10時の開

店に備えて、店頭に並べる商品の整理に追われていた

デリケートな発砲スチロールに梱包された惣菜を棚に並べたり、肉売り場の商品を冷凍庫から引っ張り出して惣菜同様に並べたりするなど忙しかった

(くそつ、毎度ながらここのバイトは忙しいなア

こんな事になるのならば都会に出てフリーターにならずに何処かの会社に勤め正社員になるか、地元で大学又は専門学校に通つて親のスネをかじりながらもう少し楽を、、、やいや将来的に他の道を模索する道を選べば良かつた

流石に二ートなんてだらしない者にはなれんからね)

こんな事を考へている内にあつと/or間に店は開店

レジ打ちに仕事をシフトチェンジした空は、今夜のメニューや昨夜放送されたお笑い番組について考えながら仕事をこなしているとあつという間に12時半の休憩の時間のチャイムが鳴つた

パートの人間ばかり居る休憩所（仲は悪くないのだが）で飯を食いたくなかった空はいつもスーパーの近くにある茶々丸という変な名前の喫茶店で食事を取つている

そこのマスターは氣の良い中年の、と言つよつは、ダンディー膳とした影を持つた大人の男という風情な感じで、空も此処に上がり職を探していた当初はよく世話になり、マスター特製コーヒー牛乳をじこ馳走してもらつっていた

「ちわーす

ドアから店に入るとコーヒー豆の香ばしい匂いが空の鼻をくすぐる
クラシックという単語がイメージ通り様になつてているバーの奥では、
丁寧にガラスのコップを磨いているマスターがいた

「よう空、バイトお疲れさん。今日もこじで弁当食うのかい?」

「そうす、今日もお邪魔、、

マスターが前に居る席に座るうとすると、ちょうど今、テレビで放
送していたニュースに俺は完全に目を奪われた

「——では、次のニュースです。

今世間を騒がせている多発的連續通り魔殺人事件ですが、今度は〇
〇県〇〇市にて合計8人の変死体が山本商事裏のビルにて発見され
ました。情報によれば遺体の損壊部分は激しく、所々で欠損部分が
あるようです。警察は猟奇的犯罪の線で捜査を進める方針で——

最近世間で話題に上がり、多局でニュースになる頻度もかなり高い
同時発生通り魔事件だ

発端となつた最初の事件が発生したのは半年前で被害者は今より少
ない一人程だつたのだが、

その内一人の遺体は体が所々欠損していたらしい

そんな感じでニュースで勿論知り得ない情報をある友人（と言つよ
り悪友）先程と同じく変死体と放送されていたが事実以上にネット
上掲示板などの噂で聞くような情報にまで踏み込んでいた

それによれば通り魔に遺体を喰われただの、犯人は悪魔の儀式を行つていただの、悪魔が取り憑いていた等の事が面白半分に囁かれていた

空個人としてはそのような噂を鵜呑みにしなかつたものの、今まで生きてきた中でこの事件がどれだけ異質であるかを彼なりに感じ取つてはいた

この事件は邪悪かつ醜惡な企みによつて齎された物であると

そして空の悪友も同じ様なことを言つていた

しかしいくら同じような事件が過去にあつたとしても同時期にこれほどまでに不気味な犯人が多数存在して同時期に通り魔事件を起こそなんてことは非常に考え辛い

同じ時間にて散発的に行われる犯行自体は以前悪友と共に個人的な興味で調べていたアメリカの同時多発テロに似てはいるが、あの事件とは異なり、この通り魔事件は半年前を皮切りに長期に渡つて先程の殺人事件に酷似した犯行が各地で所々続いている

まさか有り得ないとは思うが、こうも不透明で先の見えない事件はネットで囁かれていた悪魔が蘇つて取り憑かれた人間が凶行を行つているという説も奇妙な真実味を浴びてきてしまう

しかしそれ以上に腑に落ちない点は犯人の動機だ

俺は悪魔説を受け入れた訳ではないが、何故か、今までの事件に潜む黒幕が存在するかもしれないと疑つていたのだ

根拠はないし、陰謀説もマスコミやネットで言われている事もあつ

た、それにこれは事件の傾向も考慮にいれた上で半分くらい空本人の直感も入っている

しかしながら騒がれている話はやっぱり事件を楽しんでいる連中が下手なSFや映画を元にしたジョークに当てはめて笑い話にしているだけで確実な根拠が在るわけでもない

不気味で黒幕を赦せない事件だと思いつつも、空も事件を楽しんでいるところでは、やはり世間の連中と変わらないと言つだけの話だ

セレヒト、空はマスターに尋ねた

「マスターは、この事件の事をどう思っています？」

「妙な事件だと思う。少なくとも私が今まで生きてきた中でこれほど奇妙な事件は知らないよ」

そう答へ、言葉を続ける

「犯行の異常性については何か不気味な組織めいたものがバックに居るのではないかと感じている」

なるほど、論点は空とそれ程変わらない

「セレヒトと同じ意見ですね」

マスターは再び話す

「だがやはり、この同時多発連續通り魔事件に関して言えるのは、個人の欲望なんかより巨大な無機質な意思が介入している点だと思

うよ

犯人の経歴は至ってバラバラで共通点が見えないし、容疑者の全員が全員そうではないかもしかんが、犯行を起こすような人格の持ち主は極めて少ない」

そこでマスターはいつ用意したのか、コーヒー牛乳の入ったガラスコップを空の眼前に滑り込む

その時のマスターの動作が洋画で主人公に注文した酒を渡す際にバーの奥から細長いテーブルを伝つて中身の入ったグラスを主人公の前へと滑り込ませる動作にそっくりだったために、今は見慣れたとはいえ、空は初見の際にびっくりしたものだ

勿論マスターから空への奢りである

空が礼を言つてそれを飲み干すまで待つた後に言葉を続ける

「それに犯行の共通した特徴——逮捕いや、中には行方不明になつたものも居るらしいが全員が錯乱しているような事を言つている

「さあ？殺人犯なんてみんな頭おかしいことばかり考えているんじゃないですか？」

「さてな、それについては私でもよく知らん。知りたければ専門書でも読むか、キミの好きなネットから真実を探り出すのだな」

「流石に其処までしたくないですよ、ヽヽ」

げんなりとしながら答える空を無視して続けるマスター

「それに時点の共通点であり重要な情報もある被害者の死体状況だ。テレビなんかのマスメディアでは変死体としか発表していないが、

君との会話の話題になるるると思ひ少し調べみたのだ。

しかし、驚くべき事が判つた」俺は気になつて聴いてみた

「判つた事つて一体何なんですか？」

マスターは静かな表情を作つた後、静かに答えた

「体のあちこちが欠損していたという死体には、何者かに食い破られた跡があつたそうだ、当然の事ながら野犬やカラスの仕業ではない、人間がやつたのかと言われてもまるで違つ。そう、それはまるで、ヽヽヽ」

空は弁当を食する手を休め、重要な事実を聞き逃さんとマスターの声に静かに意識を傾ける

「人間に極めて近く、それでいてかなり身体能力を誇り、これまでも全く確認のなされていない未知の生物の痕跡だつたらしい」

「何ですつて？」

意外過ぎる事実に空は思わず立ち上がつていた

I 田中〇三（前書き）

今回の話から完全書き下ろしなります
更新遅れてすみませんでした m(ーー) m
話はあまり進みませんがお楽しみ下さい

7月23日19時52分 マンション内 193号室（家の部屋）

空は帰宅すると同時にすぐに冷蔵庫を開け水色のラベルが巻かれたブレンディの500mlコップトルペットボトルと冷えたコップを取り出した

キッチンの木製テーブルにコップを置きボトルの冷えた中身を注ぎ込む

暗い褐色の液体がコップの中身を半分少し位満たすとそれを空は口元に持つていき一気に嚥下した

「ぐぐ、ぐぐ」と喉を冷えたコーヒーが流れていぐ度に、熱くなっていた思考が冷やされ、少しずつだが徐々に冷静さが戻っていくのを彼は自覚する

心身共に静まつた事を語るとコップとペットボトルをその場に放置し、すぐにパソコンの置いてある血室に急いだ

部屋の電灯を点けるのもされ、彼はディスプレイのスイッチと本体の電源を入れる

暗い画面はすぐに青一色の空白に変わり、中心には小さな白地で【起動中】の文字と砂時計を模した小さなアイコンが表示された

ものの五秒も経たない内に画面は切り替わり緑一色の森林を背景に

したデスクトップと彼が普段使用する幾つかの機能を表示したアイコンが出現する

彼は焦る気持ちを抑えてマウスを操作してメール作成画面に切り替えすぐさまキーボードを叩いて文面を作成した

こんな事を宗に相談するのは高校在学中に一緒に調べた十年前に発生した隕石落下事件以来の事だった

『宗

例の連続通り魔の事が知り合いのマスターから情報が入った
すぐに返信頼む』

そして矢印のアイコンで【送信】をクリックし、メールを送信
すぐに宗から返信は来ないだろうから今の内に自分はやれることを
やつておく

調べ作業は宗の方が自分より遙かに詳しいはずではあるが、無駄にはならないと信じたい

メール送信後はすぐに画面を閉じ、インターネットに接続する
連続通り魔事件をキーワードに入力し検索

すぐに沢山の記事がヒットし、表示された

しかし、そこにあるのはニュース番組のサイトやそれに準じた掲示板ばかり

試しに先頭の三十件くらい覗いていたもののマスターがもたらしてくれたような詳しい情報は掲載されていなかつた

空はむう、と呻いた

マスターの情報の出どころも非常に気になるところではあるがこうも検索に引っかかるないので話をしてくれた彼に悪いのだが、ガセネタではないのかと疑つてしまつ

少し目がチカチカしてきた空はパソコンの上に飾つてある灰色の塗装すら施されていない F-15 イーグルのプラモを見上げた

これは宗が大学の多忙で処理しきれない積みプラモデルを彼にくれたもので少し古いスナップフィットで組み上げる物ではなく接着剤でパーツをくつつけるタイプの昔に流行ったキットで組み立てる際はパーツがよく外れた為に散々時間をかけた気がする

塗装もしていないデカールを張つただけの簡単な素組み仕上げだがシャープなフォルムが意外と気に入つたので、こうして今でも飾つているのだ

宗によるとこの機体はアメリカやイスラエル、サウジアラビア、そして自衛隊も使用している旧式だが未だに現役の戦闘機らしい

その時は宗の意外な知識に適當な相槌で答えたのだが、知り合つて随分経つ今から考えても彼の多芸多趣味ぶりには未だに驚かされるばかりだった

空自体も自衛隊の戦闘機なんてテレビで映つたとしても、とくに感心すら抱かなかつたのに

イーグルを手に取り思い出に耽つてゐるヒイーグルの横に置いてあつた時計が目に入る

時刻は空がインターネットで検索を初めてからそろそろ一時間が経とつとしていた

(そういえば、宗からのメールは既に届いているはずだ)

案の定PCをデスクトップに戻すと画面にはメールが知らせることを知らせる表示がある

予想通りと言つか、メールを送信した以上、返信が来るのは当然なのだが送り主は宗である

さっそく空は送られて着たばかりのメールを開いた

『 空

悪い。気付くのに割と時間がかかった。俺もサークルやレポートで忙しいからな
高校の先生が大学は暇だとか言つてたのになんでこんなに忙しいんだ?

これって詐欺だよな

空は胸に溜まりに溜まっていた溜め息を吐いた

(愚痴かよ!)

心の中で宗へのシッパーを入れる

まだメールは続いていた

空はモチベーションの低下を自覚しながらも続きを読む

悪い、なんか下らぬ一事をグダグダ書いてた

んじゃ本題だ

一体そのマスターとやらからどんな情報を得たんだ？

お前焦つてたらじくて肝心な事実を書いてないぞ

メールじゃ返答が遅れるから俺から電話じよりつか？

そっちの方がスムーズに話が進むだろ？』

空はなるほど、といった風に左手を自分の顎に沿えて頷き、メールの返信を打ち込んだ

『宗

わかった

でも電話は俺から掛けさせてくれ

お前はバイトで学校行ってるんだろ？

だったらこんな事で無駄な金を使わないで俺に頼れよ

送信する

そしてものの一、二分も待つと宗から『了解』とだけ記されたメールが返ってきた

空はケータイを充電器から取り出し、久しぶりに話す親友の番号を電話帳から選択し電話をかけた

いつもは電話に出るのが何故か遅い宗にしては意外といふが、空と話すために前もって用意していたのか判らないが彼はすぐ出た

「久しぶりだな、宗」

「俺もだ、空。

いつもして話をするのも一年ぶりだが」

空は苦笑した

確かに、久しぶりの会話だった

メールではニュースや珍しい事件について散々議論を交わしているのに電話越しとは言え、直接宗と対話するのは一年ぶりの事だった

実際、空は不思議なものを感じていた

宗とは全く連絡を取り合っていないわけでも無いのに、宗の肉声を聞くと不思議な懐かしさが胸の中に満ちていくような気がする

「俺がお前に電話するなんて、姉貴にお前が告つて玉砕した時以来だよな」

「止める。マジでの時の話題は出すな

今でも傷ついてるんだからな、お前のせいだ」

「悪い。あの時は少し悪ふざけも入つてた」

僅かに声量が下がった宗の声に慌てて空は答える

「いいわ。今ではいい笑い話だからさ
それに、あの時はお前にかなり助けて貰つたからな
いいわ。今の失言は許してやる
ただしいつかゲーセン行くとき奢れよな」

「ちょっと…待て

親愛なる友人である空様は高い学費をバイト台で貯つてこいる俺にそ
んなことさせるのか？」

空は少しばかり言い過ぎたとばかりに田を開じた

「冗談。からかってみただけだ」

「別にいいよ。さつきのは少し不謹慎だつたからな」

空は過去の出来事を思い出していた

宗の姉でボーアイッシュな活気溢れる礼子の事

昔に自分が足をすりむいた際に手当てをしてくれたこと

宗の家に行くのが彼女を見る目的といつ不純な動機であり、その時
に変わり者の弟である宗と仲良くなつたこと

そして高校一年生の時に悪ふざけで飲んだ酒の勢いで礼子に告白し
て降られた苦い思い出

それらの記憶を反芻し、彼は数秒間だけ蛍光灯の光が照らす白い天
井を仰ぎ見る

その様子から察するに彼は宗の姉である礼子の事を未だ気にしているのだろう

それとも過去の失恋を思い出し、感傷に浸っているのだろうか？

それは空自信にもわからない事だったがいざれば決別しないといけない事実だと彼は思った

「まあいい。じゃあ連續通り魔について俺が得た情報を話すぞ」

「おけ。」

彼はすぐに気分を入れ替えると、マスターから聞いた奇妙な話と、自分なりに予測した推理を交えて宗に伝えた

謎の連續通り魔殺人事件は全国でここ何年の間、散発的に発生していること

マスコミによって二コースで報道されている情報は公開されていな
い情報が潜んでいること

情報操作の可能性を考慮して見ると、何らかの組織が圧力をかけて
いる可能性があること

そして…

「これは俺も初めて聞いたとき嘘だと思ったけど一応言つておく
通り魔の犯人は実は人間じゃない別の生き物だつていう事を聞いた
んだ」

電話越しに重苦しい間が発生する

恐らくは宗も驚くべき事実をすぐには受け入れられずに混乱した頭の中を整理している、と空は考えた

宗はこんな時に限って頭の回転が早い
すぐに返答を寄越してくれるだろつ

空は前の隕石落下事件の時も宗を頼りにしていた

結局の所、得られた情報から推測できる事が少なかつた事と宗や空自身の飽きもあつたので中断したつきり中途半端な情報がH.B鉛筆で殴り書きしてあるとてもレポートと言えない文章の落書きがページの半分を埋め尽くしたノートは空の部屋のどこかに放置してある持つてくれるつもりは無かつたのだが引越しの荷物に紛れ込んでいたらしい

確かに事の始まりはこれだけの大事件に反比例してマスコミがニュースで流した情報があまりにも少なすぎる事実に不満を持つた宗が独自に研究しようといった感じで、空がそれに便乗したものだつたがいくら調べたにもかかわらず情報は殆ど入らなかつた

宗が得意としているネットサーフィンを用いた情報収集ですらガセネタの域を出ないだれかの妄想まがい情報だつたからだ

一、二ヶ月経つた頃になると空は既に事件への興味を無くし、熱心に調べていたはずの宗もマスクミが明かさない情報と憶測の域を出ない噂を収集する作業に疲れ、作業を断念した

つまりは今回の場合はそのリベンジとなるわけだ

それに前回に比べて有力な情報もある程度は自由に使える時間と力もある

それは前回成し遂げられなかつたものに対する残り火であり、退屈な日常を少しでも楽しくする娯楽もあり、宙ぶらりんな毎日を送る今の自分に対しての挑戦状でもあつたのかもしれない

「ふーん

で、そのマスターって人はそんな事を話してたのか

「信じられないけどな」

「けどな、通り魔事件は俺も少し調べてたんだけどな

「えっ…」

意外な宗の反応に空は微かに驚く、宗は大学が忙しく学業に追われてそんな暇も無いと踏んでいたからだ

「だからさ、俺もお前が話した事は信じがたい。
もしかしたらマスターって人がお前をからかおうとして嘘をついた可能性もあるだろ」

空は言葉に詰まつた

「それは…」

宗が言つ

「俺は自分で見たもの以外は信じない主義なんだ。

だから他人のフィルターにかけたマスクの情報は信用しないしじ
ツト掲示板の噂も参考程度に留めて鵜呑みにはしない
俺は真実が欲しいんだよ」

空はまた宗の野次馬演説が始まつた

とうんざりした

正直に述べるならばこうなつた時の宗は手に負えない事を重々承知しており少し鬱陶しい部分もあるのだが、宗の真っ直ぐした性根は嫌いではなかつた

「なら、どうするんだ?」

「決まつてるだろ
そのマスターつて奴に直接話を聞く
で、案内頼むぞ

明日大学サボつて来るからそちらも何とかしてくれ

「お、おい
ちょっと待…」

ガシャン

ツー

ツー

ツー

何故だろ?と空は思つ

これまで強引な奴なのに何故か嫌いにはなれない
しかし不快を感じていたのならばここまで友人関係は継続しなかつたろう

宗は基本的にウソはつかない、それに意外と気を利かすので自分の
バイトが終わる直後の時間にマンション前で待ち構えるのだろうと、
明日の夕方の未来を空は容易に予想できた

だが悪い気はしない

むしろ、胸が躍った

さて、明日に備えて準備するかな

デスクパソコンの上に飾つてあるイーグルのプラモを見て、空は軽
く苦笑していた

一四三〇五（前書き）

めいぢやく一四三〇終了
てか今ノートに書いてる小説の方が進んでるつて事は…

7月23日23時06分某所

「また見つかった」

此處は空の住む街より北東にある人里離れた場所である

そこには道端に無造作に捨てられた喉を喰いちぎられ、そこで立ち尽くし、体の所々に欠損部が目立つ死体を眺めている黒ずくめの女は傍らに立つ黒ずくめ大男の隣でぽつりと呟いていた

この辺りは、ぽつぽつと木造の民家と通常の住宅が建ち、青々とした広大な田んぼが幅を利かせている

町というには人気が無く村と呼ぶにはアスファルトで舗装された道路が目立ちすぎる。

更には夜まで近くの工場が深夜近い今でも稼働しており、中途半端な農村とも呼べた

生まれつき文明圏に住を構え、そこから一步も足を踏み出した経験が皆無な都會の人間からすると、辺境とも呼べるこの地では明らかに黒いコートを羽織つた一組の男女はあまりにも異質かつ場違い過ぎた

女は一言で説明すれば間違いないく美人に類する顔立ちである

キリリと真っ直ぐ引き締まつた眉、薄くても形の良い紅唇、少しキツそうな目つきはそれでいて強い意志を感じさせる輝きを放ち、う

なじの少し上辺りでくくつたポーテールは腰の辺りまである絹の
ようすに艶やかでまっすぐ伸びた黒髪とセットで彼女の凛としながら
も儂げな印象を他人に与えるのに一役買つている

夏の夜だとは言え、足元までの長さを誇る動きにくそうな黒いコー
トを着こなしたその体はくつきりとグラマラスなラインを描き、凛
とした彼女の雰囲気と調和しつつ、さながら夜の女神といった莊厳
さを演出していた

男の方はまさしく彼女とは対になるといった風情であった

彫りの深い顔、経験を積んだ歴戦の軍人という感じの落ち着いた雰
囲気、血肉に飢えた狼すらも尻尾を巻いて逃げ出しそうな程に鋭く
冷たい眼光、キツチリと無造作に切られた短髪、そして特筆すべき
は二メートル近いその身長

身長の高さに比例して彼が羽織っている巨大なコートは女のそれと
は違ひあちこちにゴシゴシとしたラインが浮き出ている

何がコートの下に収まっているのか？

コートの下にゴシゴシ収まっている“モノ”の正体は一体何なのか？

平和ボケし過ぎたこの国の国民が好奇心から安易にその問い合わせ
るには躊躇われる位の危険な雰囲気をこの男は自らの周囲に侍らせ
ていた

「これで、三十人目か」

男が感情をあまり表に出さないながらもせつせつと聞こえるような
口調で言つ

「どうやら“感染”はしていないみたいね
喉を喰いちぎられた後を調べてみたけど、傷口に“因子”は殆ど残
っていないみたい

“感染”させる目的で咬んだんじゃないわ

言つならば腹が減つたからつまみ食いした感じ」

男は訝しげに眉を顰めた

「要するにまだ連中による制御が行き届いてない。と云つわけだな」

「そうね、それもいつ“暴走”を引き起こすか判らない
仮に“進化”してしまったら“アイツ”でも制御が困難になる」

「それなのにこんな田舎で犠牲者が見つかるとは連中は相当遊んで
いるか、実験のデータ採集の目的か」

「あのバカが関わっているなら両方あり得る話だわ
だってアイツは人間を憎んでいるからなるべくなぶつてやらないと
気が済まないのかもね」

男は問う

「お前も昔は恨んでいたんじゃないのか」

女はまっすぐと形の整つた眉をひそめて答える

「昔の事よ、昔の。

それに、私がまだあのバカと一緒に“先生”的考へに賛同してたら
きっと似たような事をしでかしてたと思つわ」

そうか、と一言だけ男は相槌を打つ

女は言葉を続ける

「その私達を育ててくれた先生も今は居ないし、あのバカが独りではしゃいで騒いでるだけだから、アイツをどうにかして“実験”的データも全て消去すれば全部丸く収まるわ…多分」

彼女はそうは言つたものの言葉とは裏腹に台詞の後半は声が小さくなつていた

「そうだな。では早く行動するぞ」

「了解」

一人は死体をそこに残して近くに戦闘が起つた際にすぐに盾に出来る位置に止めてあつたワゴン車に向けて歩を向いた
女は車に乗り込む前に置き去りになる死体に一瞥し

「1)めんね」

と小さく謝罪の意を示した

車に乗り込んだ二人はそれぞれ男が運転席女が助手席に座る、無論二人ともシートベルトなどは着用していない

これから起じる事態を前にして交通事故といった些事など気にしている場合ではないからである

それ以前に“敵”が襲撃してくる可能性が僅かでも存在する以上は常に戦闘時に備えて身を束縛する行為はなるべく避けておきたい理由も兼ねている

「メンバーはもう向こうに着いているのだろ?」

「なんの不都合も障害も無ければ。だけどね」

「やうか、だが何が起きても俺達はやり遂げなければならぬ」

俺とお前の因縁に決着を付けるためにもな

男はそれをあえていわなかつたが隣の相棒は口に出さなかつた彼の言葉を汲み取つたかのように軽く頷く程度で応えた

男がキーを回してエンジンを始動させる

駆動音が夜の暗闇に響きわたると共に、車はすぐ空の住む街へと走り出した

彼らが去つた夜天の中、雲の間に姿を見せる満月だけが残された死体を見守っていた

そして一日目は終わる

バラ蒔かれた不穏の種を内包しつつ

そして、それが発芽したときに入々の運命を巻き込んだ混乱が生まるだろることは想像に難くなかった

この建物は何かの研究所らしかった

照明が暗く判別が付きにくいのは確かだが大型トラック一台分くらいの幅を誇る通路両脇にズラリと規則正しく円柱状のガラス槽が多数並ぶ様はなかなか壯觀であります。お目にかかる光景では無いだろう

そのガラス槽を満たす溶液の中にはかが入っている

こここの薄暗いフロアでは判別が付きにくいがシルエットを見すると体を丸めた猿の標本が浮かんでいるかのようだ

しかし、よくよく目を凝らして見てみると猿にしては大き過ぎる上、毛布のような薄茶色の体毛も生えていない
そして、ソレは代わりにきめ細かい綺麗な質を持つ極めて白に近い薄ピンクの皮膚が表面を覆っている

ただ、その皮膚は生命を喚起させる赤みがかつた肌色ではなく、どちらかと言えば腐敗する前の水死体の如く血色が抜けすぎて青ざめている気がするのだが

そう、おわかりになられただろうが、これはれっきとした人間である

否、だったと言つべきだろうか？

それを証明するのはただの前日にこの場所であつた出来事だった

「……」

ここに、ある人物が居た

白い白衣を纏う人影は培養槽を見上げ、なにかを思案しているようにも見える

一言で表せば、その人物は美しかつた

僅かに紅みを帯びた黒瞳、鼻孔、唇のラインは奇跡的なレベルで整つており古代の芸術家が大理石より削りだした伝説の神々の像の如く莊厳なイメージを見る者に抱かせる

そして日光を反射して輝く絹を連想させる白に近い銀髪

その人物の雰囲気そのものが澄んで見えたのであつた

このような人間は滅多に居ないだろ？

よほど人生経験豊かな老人か、生涯中になかなりの仁徳を収めた聖人か、ましてやこの世の毒を知らぬ生まれたばかりの無垢な赤ん坊かもしくは、自分の信じた道を如何なる手段に頼つてもひたすらに進み通す邪教の信徒か

その男とも女とも言えぬ中性的な美しさを持つ人物は極端な言葉で示すのならそのような雰囲気を身に纏っているのだった

『P R R R R R R R』

携帯電話のありふれた着信音が薄暗い通路内で反響するデフォルトのまま変更すらされてない着信音すらもこの無色の気を纏う人物には似合つてゐるようにも思えた

人影はポケットより携帯を取り出し少し億劫そうに耳に当てる

「ロウガかい？」

電話に答えた声は限りなく中性的なソプラノ

声質から判断するにこの天使のような容貌を持つ人物は少年らしい

『そうだ。二ル

そちらの準備は完了したか？』

“ロウガ”なる通話相手に彼 二ルが答える

「こっちの方は大丈夫だよ

拉致した一般人の試作ゴーレムの準備はさつき終わった

調整に色々苦労したけどね

言い終えるなり電話を持たない手を顎に軽く当ててクスリと笑う
その仕草は少女のように可憐なものだ

『やうか

では俺は監視任務を続ける
計画の実行は明後日だな?』

「うん

“浸食体”とターゲットの融合実験は一日後だよ

ロウガが戸惑つたように尋ねた

『…お前に意見するのも気が引けるのだが
ターゲットを拉致して専用のラボでやつたほうがより確実な成果が出ないか?』

ロウガの疑問にニールはすぐさま返答する

「適合実験は野外でしたほうが沢山のデータが得られるからさ
それに僕らの“スポンサー”もいかなる環境でも適合するモノを求
めているんだ

無菌に洗浄された綺麗な研究室では発生しないイレギュラーもある
から外で実験しないと充分な結果が出ないだろ?」

『……』

「それに街中では“アーレムや融合細胞のエサがたくさん住んでる
今までにはコソコソやつてくしか無かつたけど今回は自由にやつてい

いらっしゃいよ

余程、兵器として早い段階で実用化したいんだね
これは僕の提案だけど許可したのはこの国お偉方さ
仮初めの対面ってヤツもあるから渋るかと思つたけど意外とすんな
り提案が通っちゃったから拍子抜けしたさ
かなり戦争をする道具が欲しいんだろうね
それともよほど

「

同族殺しが好きなんだろ? う?

言葉の後半は唇の動作だけで紡ぎ、声に出さなかつた

『了解した。

俺はお前に言われたことをただやるだけだ

異論は無い』

「ありがとう、ロウガ」

ロウガに礼を告げた後、少年は天使のように微笑んだ

電話が切れる

少年は携帯を白衣の中に仕舞つて、広い通路を更に進んだ

しばらく行くと通路の中心に両脇にある培養槽と比較にならない通路の半分のスペースとほぼ同等の大きさを誇る培養槽の前に立つ

その中に入っているのは他の培養槽と同じ、ゴーレムのなり損ない

”ではなかつた

そこに入っているのはそれよりも小さかつた赤黒い塊が毒々しい緑

の溶液の中に浮かんでいる

ニルはその肉塊を一瞥し、先程とは違った明るい微笑を見せる
それは 何かに対する期待感だろうか
そして彼は巨大な培養槽

いや、その中に浮かび脈動している醜い肉塊に向かい語りかけた
「もうすぐですよ
おそらくは姉さんも計画を嗅ぎ付けて来るでしょうから今から樂しくなります
だからあなたはそこで見守つていてください

僕達の業を」

そしてニルは培養槽に背を向けて、歩いてきた道を戻つて行く
その間、彼は振り返る事はしなかった

I | 四三四〇一（前書き）

話が全く進まん
まいつたな

7月24日 喫茶店“茶々丸”

零時過ぎでとつてに営業時間を終了してゐるにマスターは店の掃除をしていた

水で絞つた綺麗な雑巾でニースで艶やかな茶色に塗られた木製の円板に四本の丸い木材が支えとして取り付けられた質素なデザインながら堅実な造りをしているテーブル拭く

このテーブルは彼の“本業”が無い暇な時間にわざわざ材料を買い込んでマスター自らの手で製作されたものだ

雑巾は毎日洗つた物を十枚以上用意してから、拭く度に取り替えながら使用する

マスターは客が来ないときは自ら進んでそうしていた

別に彼は極度の綺麗好きであるとか、埃を異常な程不快に感じるなどといった潔癖症も持ち合わせていない

ただし、喫茶店は客を呼び込む場所である以上最低限の手入れは行つておかなければならぬ

ここはあまり人が来ず、静かな逢瀬の時を過ごしたい今時珍しく慎ましさ溢れる一組の大学生らしきカップルと神城空がバイトの昼休みに訪れる以外には殆ど客足は訪れない所だ

ただし、近頃は“任務”的とは言え彼等の為に店を続けていくのも悪くないと彼は感じていた

それは、仮にこのまま何事も起きなければ。の話ではあるが静謐な時を好む彼にとって魅力的な過ごし方だと思えた

それに元々彼は争い事は好きでは無い温厚な性格をしていた

だが、今の“政府”が国民に黙つて密かに行っている事を見過ごすほど世間でいわれる『腫れ物に触らず強者に媚びる賢い生き方』は選択出来なかつただけだ

いや、そんな卑屈な生き方を良識で愛すべき人間が賢いと思うのだろうか？

少なくとも彼自身はそう思えなかつた

今の日本は昔のように他人の事情を汲み取れる人情ある人物は大分減つてしまつたようだが、良識的な価値観をもつて居るものも決していいとは限らないし、事実彼はそのような人情味溢れた者達に心当たりはある

例えば、神城空

例えば、彼の悪友らしい甲田宗

例えば…彼の“本業”的な同朋達

act…

マスターの胸ポケットに収まつてある携帯が振動した
バイブレーション機能に設定したのは客に気を使っての事だつた
彼はテーブルを拭く手を止めて携帯を取る

携帯はストラップの付いた銀色のシンプルなデザインの物だつた
ちなみにストラップは空が旅行の土産に彼にプレゼントしたものである

マスターは携帯を操作した

そしてたつた今送られてきたメールを見て嘆息する

ああ。やっぱり来たかと

それは仮初めの日常への諦めであり、彼自身の“本業”への命を賭けた覚悟と闘争へ逃れられない定めを悟つたマスター自身への自嘲によるものかもしれない

机を拭く手が早くなる

少しくらい雑になつても店の整理整頓位は終わらせてから“準備”に入りたかった

もしかしたら捨てたはずの日常への執着心が残つているのかもしれない

テーブルを拭き終わり、雑巾をカウンター奥の台所の水で軽く洗い、
絞つてから干す

何度も繰り返した作業
夏場の夜とはいえ水はやけに冷たく感じる
心の中に恐怖があるのかもしれない

巨大で未だに得体の知れない“敵”に対しての恐怖を捨てきれないのかもしない

濡れた手を備え付けのタオルで拭いながら自問する

そして彼はまだ水気の残る手でタオルをシンクの台に立てかけてから、ある場所に向かつた

ドアを静かに開け、明かりを告げる

掃除すら口クに行つてない室内で充満した埃が意外と鼻につくのを彼は感じた

そこはマスター以外は誰も他人を入れたことの無い部屋だった

それもその筈だ

ここにある物を見たら一般人はマスターに対する種の警戒心を抱かずには居られないだろうから

部屋の中には大人が持つにしてもかなり埃まみれの大きいアタッシュケースが二つほど置いてある

旅行者やよく海外に出張するビジネスマンのプラスチックと布製で製作された安物ではない、オール金属製の特性ケースだ

それ一つを手に取り重たそうに床にそっと置く

そして取つ手の両脇に付いている一対の簡易ロックを外した

すぐにもう一つのケースロックも解除する

『ガチャ』

その中にあるのはマスターの道具だ

しかしそれはとても喫茶店業務の範疇で使用出来るものではなかつた

黒光りするソレは死を振り撒く鋼鉄の塊

アタッシュケースの中で規則的にズラリと並べられた多種多様な銃器は蛍光灯の明かりを反射してまがまがしい鈍い光を放つていた

標準的なハンドガン、カービン銃、サブマシンガン、手榴弾
名前を挙げるならばイングラム、M4A1、グロック、コルトガバメント、エトセトラ、エトセトラ……

さながら他国のガンショップさながらの大量の火器が一つのケース内にぎっしり詰まっている

比較的銃の規制が緩いアメリカ合衆国のガンショップでもここまで品揃えはないだろう

それこそこの量の銃器携帯は個人が猟銃一本所持するのが精一杯の日本では認められていない

その狩猟用猟銃ですら申請をした上で大量の書類にサインする必要があるのにここにある銃器の数は明らかに異常過ぎた

これは言つまでもなく非合法

発覚したならば十中八九マスターは警察に任意同行をされるだろう

では、其処までの銃器を収集して、彼は何をするつもりなのだろうか？

確かにこれだけの火器があるならばハイジャック、銀行強盗、テレビ局占拠などといった一連の犯罪行為も苦もなく実行出来る

だが、彼はそのような利己的かつ愚かなテロリズムを実行するために武器を用意したのではなかつた

それは人ならざる怪物と相対するための準備

(これだけの装備
確かに人ならば充分過ぎる量だ
しかし、人の枠を超えた怪物共を相手取るとなるとどうまで通用するかだが)

不意に昔の記憶が蘇る

異形と化したとは言え、子供を撃つたあの時の事が鮮明に

マスターは自嘲する

人間の大人は躊躇いなく殺してきたくせに化け物一匹殺すのに今更罪悪感を覚えるのか

都合の良すぎる解釈を推奨していく良心に吐き気を覚える

しかし、どうしても銃弾を打ち込んだ子供の顔と空の顔がダブつてしまふ

あんな事が一度とあってはならない

だから行動を起こすべきだ

マスターは独り密かに決意した
過ちを繰り返さない為に

I | 日々の2（前書き）

今作から少し短くなります
携帯では編集しづらいという私個人の身勝手な理由からですが「了」
承下さい

尚、場面の分割化を計る代わりに話の密度は上げたり更新間隔を短
くしたり努力致しますので今後も応援よろしくお願いします

早朝

夏とはいえたばかりの大気は少々肌寒い
高度が空に近くなればなる程、地上からの放射熱から遠ざかっているビルの屋上は気温が低いからだ
それが分厚い雲の影に隠れているなら同然の事である

そして、とあるビルの屋上の一角に人影は立っていた

いや、人影と呼ぶには未だに適切とは言えないかもしれない
その人影は濃紺のレインコートを纏っていた
この天気の中では不自然な格好ではある
雨除けにしては上空は分厚い積乱雲に空の青色が隠れているとは言え、雨が降るには足りないようと思える
それに空の七割が雲によつて覆いつくされてはいるが残りの三割の空からは青々とした霹靂が拌めた
どう考へても雨具のレインコートなど不要の長物である
だというのに

その人物はそれが同然であるかの様に自然な振る舞いを見せていた
ビルの屋上に暗い色のコートを羽織つた謎の影が立っている
それはシーズン真っ盛りの怪談ネタになるくらいには異様な光景だ
つた

「天気は悪くない。絶好とは言い難いが……」

ふと、人物が独り言が漏れる

低い声から察するに性別は男のようだ
しかし、それだけでかの人物の正体を推し量るには材料が足りなか
つた

(ニルによるとネズミが一匹張り込んで居るらしいが、果たして計
画にどれほどの支障が生じるだろうか?)

彼は腕を組み黙考しているようだ

人波に紛れ込んだら決して周囲に溶け込めないであろうその姿とは
意外な位、その男は物静かな空気を己が周りに放っていた

(さて、そのネズミとやら...)の俺をどこまで楽しませてくれるの
だろうか?)

コートの男が微かに笑つた様な気がした

それは見た目では全く判らない。彼の持つ空気の変化だ
例えるならば、質素な造りの太刀が白刃を晒したとき人に与えるよ
うな危険な鋭さ

つまりは剥き出しの凶暴性、忌み嫌われる暴力の証

(実験のついでになるだろうがネズミの方とも楽しませて貰う)

男の肩が微かに震えている、恐らく笑っているのだろう

男の空気は先程の物静かな様相を既に捨てていた
いま彼の人物を纏う大気はピンと張り詰めた真冬の空気の如く、鋭
く冷たい

「さて、始めるか」

男の独り言が空中に霧散する前には屋上でポートの姿は確認出来なかつた

言つておくが、彼が普通に降りていった形跡は無い
ちなみに此処は、三十階建てのビルの屋上である

元々、そんな場所等には存在しなかつたかのように一片の痕跡も残
さず「ポート姿の人物は消失していた

まるで、その存在 자체が幻だったかのように

1 | 田中三〇三（前書き）

日常描寫は難しい

神城空はマスターの喫茶店へ向かっていた

その様子は心なしか何時もより急いでいるように見えた
空自身、親友の甲田がマスターに会って話を聞いてみたいと言つて
をいち早くマスター自身に伝えるためだ

そのため、彼はバイトの昼休みが訪れるとすぐに弁当箱を包んだ袋
をひつつかんでマスターの喫茶店へ急いだのだつた

途中でバイトの店長に見つかり変な顔をされたのだが強面に見えて
実は人の良い彼はそれくらいの事で空を注意したり、引き止めて理由を尋ねたりはしなかつた
せいぜい少しばかりは仕事中に話題に出すだろうがそれ以上の検索
はしないだろう

その事は空も判っていたためにあまり気にしなかつた

空自体人付き合いには中学校以来あまり無頓着になつていたために
空のプライベートにあまり干渉してこない知り合いはありがたいものである

尤も、彼自身が集団行動に疲れ、変わり者である宗とばかり連むようになつたといつのも一つの原因では有るのだが

彼と組めば大抵の事は娛樂になつた

例えばヒトラーは犯罪者扱いされてるのに共産主義者で長年に渡り
敵対者を肅然してきた毛沢東が英雄視されるのがおかしいとか
UFOが実はドイツ軍が宇宙人の技術を使って開発した戦闘機で終

戦後アメリカ軍が摂取しただとか

有史以来続いている皇族の血で血を洗うような継承者争いは未だに続いているだとか

他人が耳にすれば変な顔で苦笑されるような事を宗は明日の天気を予想するかの如く普通に言つており、空自身歴史には興味を抱いていたので、それで日が暮れるまで何度も口論したものだ

そんなときは決まって宗はいつも言つた

「いいか？』

俺は他人に押し付けられた見方は納豆と同じくらい嫌いだから、俺は自分の目で真実を見極める努力をする
俺はあらゆるものに覆い隠されている裏側にある真を垣間見たいんだ

宗は謙虚のように口ずさむその言葉はを話すときの彼はいつものようにふざけた様子もなく、目には真剣な光を宿していた

その時の彼は同世代の誰よりも大人に見えた

その時から空は宗をなるべく手伝おうと思つた

親友として

正直昨日宗と話したとき彼が昔のままの宗でいるか不安だった

しかし、彼が『真実を見たい』と口にしたときにはその懸念は霧消していた

そして、彼に協力しようと決意したのだ

昔のままに墮落せず、己の目標を見失つていない宗に彼は密か憧れたのだ

その思いを胸に彼は喫茶店へと向かった
マスターに宗と話して貰うために

彼が彼なりの眞実に近付けるように

遙か昔に道を見失つた自分は宗を追いかけていればきっと何か目的
が見つかるだろ？

その時の為に今は全力で宗の為になるようにしたい

太陽に誰もが憧れるように、目を灼かれ、翼を溶かされながらも天
を目指したイカロスの様に

空「…宗」

宗「どうしたんだ? 空」

空「俺…お前の事が…」

宗「止めてくれ

その先は知りたくない
そんな真実知りたくない
だから止め……アツー

しばらく走った末、空は喫茶店のドア前に着いた

マスターの喫茶店は今時店舗の入り口としては珍しく木製のドアを採用しており隣に置いてあるサポートの鉢植えと共に珍妙な雰囲気を醸し出している

マスター曰わく自動扉を採用する店も増えてきているらしいが彼の趣味により入り口にはドアを付けたらしく尤もここから中が見えないお陰で何も知らない人からはいかがわしい店だと見られている事もあるという

「でも良いよ」的な事を思い出して空は嘆息した

とつあえずマスターに話をしないと

ドアノブを開けようとする

(.....?)

鈍い真鍮色のノブに手をかけようとしたときにビックからか視線を感じた

(なんだ
見られているのか?)

空は訝しげに思つて辺りを見回してみたが誰も居なかつた

(気のせいか)

視線なんて野良猫や鳥にも出せるものだと半ば強引に自分を納得させ、空は店に入った

「ういーっす！」

マスターはカウンターには居なかつた

（今日、留守なのかな？
でも、ドアには営業中の札が架かつてたし）

その時、突然

空の近くのテーブルからトンと何かを置くよくな音がした
見ると普通のガラスコップ、中にはマスター特製のカフェオレが入
つていた

そしてそここのテーブルに座つていたのは

「マスター！」

マスターはびっくりした様子の空を見、壯年の彫りが入つた精悍な
顔がいたずらっ子の様に綻るんだ

「どうしたんだい空君

今日の君は私に何か用があるのか？」

ズバリと図星を刺された空はあちゃーという感じで自分の頭を軽くたたいた後に答えた

「なんで判つたんですかマスター？」

マスターは曖昧に笑いながら答える

「さあね。

伊達に何十年も人間やつてる訳じやあないからね
君の考へてることはだいたい顔にでてるよ
で、用件は何だい？」

すぐに空は話し始めた

宗が昨日此処で話した連續通り魔殺人の裏に何があると睨んでいる
こと

彼がなるべくこの事件の概要を知りたがっていること
そんな宗に昔からの友人である自分が力になりたいといふこと
宗がマスターから話を聞きたがっていること

要約すればだいたいそんな事だった

全てを聞いたマスターは静かな面持ちで空に言った

「空君。

残念だけどその頼みは聞けないな」

「何故ですか？」

不思議に思つて空は尋ねる

マスターなら快く引き受けてくれると思ったからだ

「昨日はほんのさわりの部分しか君に話していない
それで諦めるもよし、このことを忘れるのも良かつた」

マスターが目に真剣な光を湛えて空を見る

「君は、これ以上この事に関わるのは止めた方がいい」

「それは…」

マスターがぐいっと詰め寄つて来る

それほど広いとは言えない店内で平均より高い背の彼はより大きく
見える

尋常じやないと感じた

マスターの気迫に負けければ彼の知つてゐる事を宗に聞かせる事が出来なくなってしまう

空は今のマスターが怖かったが、友人の役に立てないのはもつと辛かつた

「マスター」

空はマスターの顔を見た

「それでも、です。
お願いします

宗と話してください

あいつはこの事件の真相を自分で掴みたいだけなんですから」

マスターは鋭かつた視線をいきなり緩めて、にこりと笑う
それだけでこの狭い空間の空気が軽くなつたかのように空は感じた

「君は本当に友達想いだね」

空は先刻からするとマスターの雰囲気と同じく弛緩した空氣に安心した

彼からは了承の言葉引き出せる
そう予感することになんの疑いも無かつた
そしてマスターの口が開き

「ダメだ

余り話したくは無かつたがキニはこれ以上関わっちゃいけない

「それはどういう

「

「こりゃいう事だ」

空でもマスターでもない第三の声が場に割つて入つた瞬間
木製のドアが半ばから綺麗に切断され店内には真っ二つになつた木
片が転がり、バタンと、音を立てた

空とマスターは同時にドアがはまつていた剥き出し入り口の見た

その音は空達以外の存在の乱入の証であり

そいつは切断され入り口近くに転がった木片を邪魔そうに蹴飛ばす
ゴート姿で顔まで隠した謎の不信人物だった

「よつ。被験者」

そいつは全くの場違いな行動を侵しながら、空に向けて旧知の友人の
ように軽く片手を振った

そして、この出来事は日常を破壊する『きっかけ』に過ぎなかつた
事を空は後から思い知ることになる

I | 田四〇五（前書き）

戦闘シーン有ります

「さて、
ショウ・タイムだ」

コート着た異様に背丈の高い男らしき乱入者が告げる

その言葉一つだけで喫茶店内の空気は奇妙な男によつて支配せつた
あつた

空は状況について行けなかつた

なんだ、こいつは？

何で、此処に来るんだ？

どんな目的でこの場所に居るのだ？

そして、彼自身が抱いた一番の懸念は

(俺がマスターに用が有るのか?)

あまり急な出来事に体が緊張と男の放つ異様な空氣のお陰で金縛り
状態にある空は眼球のみを動かして男の様子を伺う

勿論、コートの下に隠された男の素顔は見えないが、フードの奥から突き刺さつてくるギラついた雰囲気から普通の穩便な目的を持つことは思えない

ただただ、不気味な非日常だけがそこに鎮座して彼を見つめていた
すると、唐突に男が空を向いた

「お前」

「な、何だ！」

男はいきなり空に声を掛けてきたのだ
戸惑う空に男はさらに淡々と続ける

「俺達の元へと来てもらおう
尤も…」

男はマスターの方を向いた
空もつられて彼と同じく喫茶店の優しい店主に目をむける
「…そいつは抵抗したいらしい」

空はマスターの変化に気付いた

マスターはコートで今もなお素顔を隠している男に対しての一分の
隙も見せずに佇んでおり、それでいて自分を遠慮なくかつ挑発的に
覗いてくる男を威嚇するように睨みつけていた

それはいつも優しく空に接してくれるマスターとは違った人物に見
えた

空の知らない顔をしたマスター

コートの人物

今現在この場でおこなっている事

そのどれもが平凡すぎる日常から、危険で、世の道理が通用しない
非日常と化して空の今と化していた

喉が見えない力によつて押さえつけられている気がした

息が出来ない

空氣はある

だが、空間に漂うそれは現実感を伴つておらず吸い込むことを思わず躊躇してしまうほどにマスターと男の放つ殺気に満ちていた

周りが一瞬にして空氣から毒ガスに変わった気がする

吸い込んだら死ぬのではないか？

そんな錯覚すら覚えてしまつ

しかし、場の重さに耐えきれずに喫茶店内に充満する無色透明の氣
体を半ば無意識に吸い込んでしまう

只の空氣だった

空氣だと解り安心した矢先に空の喉がゴクリと音を立てた

それが合図だつたかどつかの様にマスターと男は同時に動く
マスターは空の方向へ、男は右腕を振り上げてマスターへと突進する
男の右腕からは何故か三本の鋭い鍵爪が伸びていた

それが大気を切り裂きマスターへと降り降ろされる寸前にあらかじめマスターが男に向けていた手から音が出た

否、それは音と呼ぶには大きい炸裂だった

それが、連續的に発せられその都度男の体が後方へとのけぞるよう震える

空はマスターの腕に握られているモノを見た
それはゲームかサバゲーの雑誌でしか見たことのないサブマシンガンだった

名前は忘れたが、昔見た映画で敵役が使っていたかのような取り回しの良さそうな小型機関銃

それが今もコート姿の男に向かつて放たれている

空は再び混乱した

(マスターが何でこんな銃を?
マスターが人を撃つた?
あの優しいマスターが人を殺した!)

マスターに手を掴まれどこかへと引っ張られていくのを感じながら空の脳裏には無数の驚愕と疑問が頭を飛び交っていた

そして、唐突にサブマシンガンからカチと短い音が鳴り連続していた銃声が止んだ

マスターが男がいるから入り口から反対側を指して叫んだ

「早く裏口へ！」

ヤツはまだ死んではないッ！」

マスターの荒々しい雰囲気に圧倒されながら空は言われた通りにした

去り際にマスターの方を見るとマスターはサブマシンガンの弾薬を慣れた手つきで交換し、再び男へと向けていた

ワンカートリッジ分の銃撃を受けながらも男はコートが多少破けているのみで対してダメージを受けているようには見えなかつた

それは信じられない光景だつた

自分はマスターに宗と話してくれことだけを頼みに訪ねただけだつたのに

こんな出来損ないの映画みたいな場面に出会すなんて全く理解できない

一気に日常が非日常に侵食を受けたみたいだ

それに、自分を狙ってくるあの男は何なのだろうか？

走りながら思考していく中で空は泡のよつて浮かび上がつてくる疑問を打ち消し、喫茶店の裏口のドアから外に向かつて駆け出した

「行つたようだな」

あれだけたくさんね銃弾を体に受けたにもかかわらず、まるでダメージを感じさせない声で男はマスターに告げる

一方のマスターはに服ごと切り裂かれた胸を片手で抑えながらよろめきつつも男に銃を向けていた
そんな満身創痍な彼を見て男は鼻を鳴らす

「あのガキを底つたのか
無駄なことを」

「無駄じゃない

少なくともお前から逃げる時間は稼いだつもりだ」

男はクク、と笑いながら言葉を返す

「どうだかね？
外には別動隊が待っている
逃れられるとは思えんな」

マスターの驚愕ぶりを見て男は満足そうに鼻を鳴らした

「済まないが、此方も必死なんだな。
色々と手を込ませて戴いた」

次の瞬間。マスターが憤慨した

「こいつの外道！悪魔め！」

お前達はあれだけの非道を犯しながらまだ実験を続けるかー。」

「さあな。

俺達だつて好きでやつてるわけじゃないが、これで喜ぶ奴がいるんだとよ

詳しく述べる。興味は無いし、関係無いとは言い切れないが俺も直接は関わっていないからな」「な

マスターはあらん限りの憎悪を滲ませ男を睨み付ける

決して少なくない量の血で床を濡らしながら猛々しく敵意を噴出させるその姿はまさしく修羅にだつた

男はそれを嬉しそうに眺め、さぞかし楽しそうに叫びた

「さて、あんたも長くはないだろ？からやつせとケリを付けるなるべく俺を楽しませてくれ」「

男が人の枠を遥かに超えた速度で一瞬の内にマスターへと飛びかかつた

I | 四〇〇五（後書き）

機会ありましたら「国籍法改正案」で検索して下さい
あれは凄い法律です

I | 日記06（前書き）

現在の世の中の動きを見るに小説なぞ呑気に書いていいる場合では無いのであるが…

「 ッ！」

常人から見ると信じられない速さで鋭い鍵爪が迫つてくる

完全にかわせないと悟るマスターは瞬時の判断でイングラムを前に突き出し盾にしつつ、後方へ大きく跳躍した

衝撃を逃す事で辛うじて即死の一撃を凌ぐ

だが、その代償としてイングラムの機関部には男の鍵爪が深々と突き刺さり、無残な傷を晒した

機関部の損傷は銃の機構上致命的である

イングラムが使い物にならないと判断したマスターは只の鉄塊と化なってしまったサブマシンガンを男に投擲しつつ、出血する胸の傷を庇つていた手で懐から第一の武器を抜きそのまま一瞬で男に照準を向ける

男も当然それを見逃す筈もなくマスターに致命傷を与えんと信じられない速さで直進し、一気に三メートルもの距離を詰めた

マスターの握ったベレッタ拳銃が至近距離まで迫ったコートの男の頭部付近に向けられ火を噴き

乾いた発砲音が三つ連続し店内に響いた
しかし、すんでのところで男は屈み銃弾を回避

決死の至近射撃は男の側頭部付近のコートを抉り、ズタズタにするだけの結果に終わった

コートを破られた男は「」の顔にかかるボロ布の下からマスターに鋭い視線を向ける

「お前は…？」

微かに口を開き驚愕するマスターを見上げ、男がニヤリと笑つたのを見たのと同時に

マスターの腹に下方から拳が突き刺さり、重たい衝撃が彼の体を吹っ飛ばした

吹き飛ばされたマスターは周囲に血を撒き散らしつつ、椅子やテーブルを弾き飛ばし派手な音を立てながら彼の体は壁に叩きつけられた

「よくやった、

今のは俺が人間なら間違いなく死んでいた

ただ一、三年戦闘訓練を積んだだけの奴なら最初の一撃で終わつている

並の人間では人を超えたこの身に対抗する事すら出来んのだからな

貴様。

以前に俺と似た奴と戦つたことがあるのか？」

その言葉に反応したのか服のあちこちが破け、血で赤黒く染まつた
満身創痍のマスターが僅か身を捩らせる

その様子を一瞥し、男はゆっくりとまるで警戒などしていないかの
よつてマスターの倒れている手前の地点まで歩いてきた

「そうだつたな

貴様は“組織”的一員だ

だつたら実験部隊とも交戦経験があるはずだ

そつ言えば…

男は何かを思い出したかのよつてホールの上から顎を撫でる仕草を
した後に告げた

「俺はデジタル資料でしか見たことがないが

お前

実験部隊の初期隊と交戦して全滅させた機関の部隊のひとりだろ？

なる程

だからこそ“オリジナル”に匹敵する身体能力を持つ初期型の俺を
相手取つてここまで持つわけだ

……へへへ

男は嬉しそうに笑つた

「一トを深々と被つた得体の知れない人物が体全体を震わせて低い声でくつくつと笑い声を挙げるその様はひたすら不気味としか言いようが無い

「だが、全滅させたと言つても貴様らの方も被害は甚大だったようだな

ヒトと試作ゴーレムの肉と骨があちこちに散乱し、どちらかが化け物か嘗ての仲間達の死体の判別などあの混沌とした戦場を生んだのはお前だ

まさしく殺戮機械に相応しい

際限なく無残な死体を生むという観点から見れば貴様もその仲間も怪物だよ

「…違う」

「ン？」

「わかる、判るさ

どんな姿になつても、仲間は仲間だ

私はあの部隊の一人だつた

国と同規模の組織を敵に回していつ死ぬとも解らないその時でさえも

恐怖や困難、苦楽そして

同じ目的を遂行する為に行動した同士達だ

どんな姿になろうとも損傷の激しい死体になつても私には判別が付いた

そして、その光景を一度と繰り返さない為にも目に焼き付けた

いや、脳裏に刻み込んだ

お前達の外道を忘れず、赦さず、打倒するためだ」

その言葉が彼に力を授けたかのようにマスターは立ち上がった

その様はほぼ死に体に変わり無かつたが、男を睨み付ける力強い目の輝きは少しも衰えておらず、空を逃がした時の迫力は今だ健在であつた

マスターが立ち上がる間、男は手を出さなかつた

それどころか満身創痍から復活した敵を目の前にして彼も闘志が沸いている

「仲間か

お前達人間の持つそれは只の口約束だと思っていたのだがな…

面白い

俺の名前はロウガ

貴様の気迫に敬意を評して全力で戦つてやる

来い」

言ひつと同時に男は「一トを脱ぎ捨てた

白田に晒されたその異様な姿をマスターは微かに息を呑んだ
ロウガは外觀からして人間では無かつた

体中は黒い体毛に覆われておりそれは窓から漏れ出す日光を浴びて
鈍く輝いている

腕からは先ほどマスターに切りつけた鋭い象牙色の鍵爪が三本伸び
ており、男の攻撃性を強調するのに一役買っている

更に目を奪われるのは男の頭部

どう見ても人間の頭ではない

狼に似たその顔は目だけがヒトと同じ明確な意志を持つた光を宿し
ている

この奇妙な、化け物としか表しようのない男の容貌はさながらエジ
プトのアヌビスか、伝承にて語られる狼男に酷似していた

「やはり貴様も化け物だったのか
それとも被害者なのか？」

男は微かに笑つた

裂けた口から鋭い牙を覗かせながら

「それを聞いてどうする
この姿は俺であり全てだ

俺の考えはお前達の価値観や論理では理解出来ないし共有も不可能だ

来い

あの子供の仇を討ちたいのだろう?

逃げたガキを今度こそ守りたいのだろう?

ならば余計な事は考えるな

その宣言で場は静かになつた

後はお互いを殺そうとする意思のみが場に充満している

ロウガは一メートル程ある己の腕より生えた鍵爪を構えてマスターに対し正眼に構える

そして、ロウガから一切の余裕や雑念が消失した

マスターは出血している箇所を庇いもせずにベレッタをロウガに向け開いた手にはゴツいアーミナイフを逆手に構える

何がきつかけとなつたかは知らない

只、そこにあるのは

二人が命を懸けた死闘を再開するという事実だけが在つた

一〇四〇六（後書き）

私達が今まで政治に無関心だったシケを払わされようとしている

詳しく述べ「国籍法 改正」で検索してください

I | 日田〇〇（前書き）

日本がヤバくなつても書き続けます。

「はあ、はあ、はあ……」

空は息を切らしながら昼間の街を疾走していた

既に休まず走り続けて5分

マスターの喫茶店からはずいぶんと離れ、バイト先のスーパーをも通り過ぎた

もう少し走れば、バイト通勤用の駅が見えてくるだろう

バイトで八時間労働しているとは言え、それでも体力的に見れば空は一般人なのだ

此処まで休まず走ったのは高校生時代のマラソン大会以来である

何も知らない道行く人が爆走する空を見て一瞬だけ奇異な視線を寄越し直ぐに視界から放す

日本人特有の面倒なモノには首を突っ込まない、なるべく保守的な特性の一つだ

仮に、この通りを歩く一般人の中で『空が何者かに追跡されている』と何者かに告げられたとしても少しばかり不快な顔を見せ、そそくさと足早に立ち去られるだろう

普通の人にとっての『日常』からの逸脱を確かに空は感じ取っていた

視界には確認出来ないが誰かが自分を尾行している

そこつまきつとプロ中のプロだ

姿ぞこりか自身の陰すらも見せやしない

だが空は感じる

それは少しばかり勘が利く彼が下した己の判断だった

何かは分からない

怪しい人影なんて探偵ですらない自分には解らない

ただ密かに影のじとくすり寄つてくる尾行者の存在感が分かった

その信憑性は普段の空ならば気にしない位の小さな違和感

日常から微かにはみ出る非日常の匂い、 感触

簡単に説明すればそんなものだ

無意識に誰でも感じ取れるが気にしないレベルの世界の歪み

彼をここまで鋭敏にしたのは空を逃がす際のマスターの言葉だった

『早く裏口へ！

奴はまだ死んでいない！』

それはつまり逃げると嘆ひ」と

空はある時、銃声で足が竦んでしまい動けなかつた
それを叱咤激励したのがマスターだ

彼には感謝するしかない。いや、しても足りないだろう

確かに自分に出来ることは何もなかつた

あの場にいてもマスターの足手まといにしかならなかつただひつ
しかし、あの時あの場所に止まつていたとしても、もう一つの懸念
が存在する

奴はまだ死んでいない。と

これはどういった意味なのだろうか？

ゼイゼイと激しく呼氣を吐きながら彼はループする思考を纏めよう
とする

思考すらも脳細胞は酸素を消費させる
だから運動中はなにも考えずに体を動かすことが望ましいと語られ
ることを空は知識として心得ていた

だが、そんな事すらも気にせずに考えた

「一トの男

男に対して殺氣を剥き出しにしたマスター

平和な日本では決してお目にかかるないはずの鉄の殺人機械 サブマシンガン

サブマシンガンの銃弾をまともに体で浴び、吹き飛んだ謎の男凶行の後で空を気遣い逃げると言つた何時もの優しいマスター空には先の事件が夢であつて欲しいと望む

しかし、これは悪夢にしては長すぎ、現実みに帶びていた今は、亡靈のように自分を追跡するものから逃げることが先だ余計な事は後から考えれば済むことである

今空に出来ることはひたすら走り続けるしか無かつた

その時だ

百メートル前方の路地から黒いワゴン車が止まるのが見えた

普段ならともかくこの状況で車の一つや一つに気を配つては入らないのだが、何故か黒いワゴン車が気になつた

これも直感で判断した空だが

車から降りた二人組は空の方を見た

二人は黒いコートを羽織つており、傍目から見るとかなり怪しげな服装をした男女だった

どう覗廻目に見ても恋人同士とかカップルには見えない

それとはもつと別の深い何かを匂わせる雰囲気が一人の間に漂っている

男の方は筋肉質そうな体つきをしておりコートがビチビチに張り裂ける程引き締まつた体をしていた

女の方はモデルでかと見間違うかのような美人だった

勿論、そんな二人組など空の知り合いではない
変わり者の宗ならば何人かいそうではあるが

二人組が空の方を向く

その拍子に片方の男の視線を空の目が受け止めた

大男は空を指差しながら女と話している

此方からでは何を言つているか全く解らなかつた

(こいつらがマスターの言つていた追っ手か?)

どうする?

空は自答した

コートを羽織つた大男が体格の大きさに見合はない洗練された動作で人並みを搔き分け、空の方へと向かつてくる

空は金縛りに逢つたように動けなかつた

黒いコートを来た大男が自分を殺しに来た死神に見える

何故か映画のマトリックスを思い出した

後六十メートル

昼過ぎの大通りを流れていく群衆の中を縫つて大男が近付く

後五十メートル

大男は人混みの中を泳ぐように進む
搔き分けられた群衆はなんの抵抗も無く自分に向かって歩く男を通した
その様子はまるで泳法のようだ

ぐいぐいと人並みを縫うようにして空の方へと向かう

空は少し恐怖を感じた

後頭部あたりの髪についた湿気がやたらと鬱陶しく感じた

後25メートル

男は既にお互いの顔がはつきりと視認出来る距離に居る

ヤバい
と思った

何かしらあの二人組は自分に用があるらしい

空自身にあんな知り合いは居ないとするとマスターと戦っていたレインコート男の言った『追っ手』としか考えられなかつた

男と再び目が合つた

鷹のような鋭い視線が氷槍の冷たさと鋭さを持つて空を見据える

時間が停止した

少なくとも空はそう思った
しかし、実際は空が男の眼光に萎縮したのだ

男は老け顔だが、厳つい顔立ちは意外にも整つており思つたよりは若く見えた

だが、眉間に刻まれた険しい皺とへの字に閉じられた口が全てを台無しにして男に威圧感を漂わせている

空は本能的に恐怖を悟つた

(殺されるのか？俺は)

だが足が動かない

空は男的眼光をモロに受けているせいか、動かすべきアキレス腱がすっかり竦んでいた

まるで蛇に睨まれた蛙のようだ

男が歩きながら自然な動きで懐から何かを取り出した

それは喫茶店でさつき空が見たものに酷似していた

銃だ

その銃口から除く闇が真つ直ぐ空の方向に向けられている

周りの人間は気にした様子もない
まるで男の姿が見えていないようでもあるし、男の雰囲気が雑踏の人々からはあまりにも異質過ぎて無意識の内に認識の外へと排除しようとしているかのようだつた

引き金に男が指を掛ける

ガチリ。という殺人機械にしてはやけに軽い鉄同士が接触するような軽い音が聞こえた気がした

その時、空は駆けた

そして銃口から螺旋の軌跡を空氣中に描きながら弾丸が発射される

空には意外と発砲音は小さく聞こえた

先のサブマシンガンより銃声が小さいことの一つの原因であるかもしだれないが

しかし、その銃声は脅威の通りを自分勝手に歩く雑踏を散らすには十分に過ぎた

場に混乱が訪れる中で空の姿をそこでは確認出来なかつた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7338e/>

国家主導非人道的実験

2010年10月28日05時39分発行